



TITLE:

実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.6

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた
めの実践型地域研究

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.6. 実践型
地域研究ニューズレター：ざいちのち 2009

ISSUE DATE:

2009-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147133>

RIGHT:

まちやむら、そこに暮らす人びと(=ざいち)の、
知恵や生きる力(=ち)に学び、実践する活動です。

ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No.6 2009年4月



京都大学
生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町 古浜

亀岡フィールドステーション

「したたかさ」というレジティマシー (1)

亀岡 FS 研究員 原田早苗

毎年 30 万人が訪れる「保津川下り」は、筏・舟運を起源とし、丹波の材木や農作物を中心とする輸送から現在は観光へと形を変えて今日まで続いている。その歴史は日本の主要な川下りと比べても長く、また戦後、京聯や阪急といった企業による経営を経て、昭和 45 (1970) 年から保津川遊船企業組合として船頭自ら経営されているという点からも他の川下りとは異なる。それは船頭たちが生活をかけて闘った結果とも言えるが、さらに古い時代まで遡ると、筏士や船頭たちがコモンズとしての保津川に関わることで地域での発言力を強めていったレジティマシー(正統性・正当性)獲得の歴史と見ることもできる。今回は 1 回目として、近世の保津川の筏流しの様子を文献資料から読み解き、筏を通じて「したたか」に生きた筏士や筏に関わる人々の姿を探ってみたい。

筏は近世以降に丹波材の需要が増加し流通業として発展を遂げる。山方と呼ばれる生産者(筏荷主)の材木は、大堰川の本流、支流でいったん筏として組まれ、宇津、上世木、殿田・保津・山本の筏問屋を通じて、京都の嵯峨・梅津・桂の三ヶ所材木屋まで運ばれて行った。実際に筏を流すのは、筏問屋に雇われていた筏士(指子、差子ともいう)であった。

レジティマシーの視点で近世の筏の歴史を見てみると、近世初期は山方の勢力が強い。筏問屋は輸送を委託されているにすぎず、山方からの依頼がない限り仕事はない。例えば、筏の規格(大きさ)と輸送費について近世を通じて幾度となく山方と筏問屋の対立が生じているが、当初は山方の主張が通ることが多かった。輸送費は山方が負担していたが、少

しでも安くするために、筏の幅を広げ、長くする傾向があった。急流の保津峡を下るため、大きく長い筏ほど危険を伴う。延宝 9 (1682) 年の協定では幅が従来通りの 1 間 2 尺(約 2.4m)、長さは山方の主張を反映し、5 間長くなり 30 間(約 54m)となる。

筏流しの最大の難所は、巨岩、巨石が散在し、急流である保津峡であり、保津・山本の筏士のみが、この急流を下る技術を有しており、次第に筏問屋や山方に対しての発言力を強め、組織化されていく。天明 2 (1782) 年の筏の規格に関わる筏問屋と山方の対立では、筏問屋が筏士から出された要求をそのまま山方に提案している。これは、亀山藩の財政悪化に伴い、それを支えてきた保津・山本の地主である筏問屋の経済的勢力も衰え、筏士を統制することができなくなったためである。筏問屋は、円滑な輸送により収入を確保するために、山方の提案を受け上流の筏士を受け入れることを決定した。筏士はその後発言力を増し、ついに、文政 9 (1826) 年には筏問屋の会議に指子惣代 5 名までの参加が認められ、筏問屋の意思決定機関に参加するまでになった。

このように、近世の筏流しは、保津川の輸送ルートを支配したい山方、独占的に保津川の筏収入を得ることができる保津・山本の筏問屋、急流を下る技術を有する筏士の 3 主体が自分たちの利益を考え、対立・協力し、「したたか」に筏流しに対するレジティマシーを獲得していく過程と見ることもできる。



保津川遊船企業組合の発足時に船頭たちが植えた桜の木。



明治・大正期の筏。

守山フィールドステーション

守山活性化フォーラムの報告

聖泉大学 高谷好一

3月14日（土）には、株式会社みらいもりやま21の主催、京都大学守山FS、守山市、守山商工会議所の共催で、表記のフォーラムが行われました。これは、守山市が中心市街地活性化基本計画なるものを進めておりますが、それをできるだけ地域住民の意向に沿ったものとして実現したい…ということで行ったものです。同時に、これまで繰り返し述べてきた通り、生存基盤科学研究ユニットの守山FSが行っている、守山市街地プロジェクトの中間発表として行ったものでもありました。守山FSでは、この狙いで毎月一回の勉強会を開いてきましたが、その過去一年間の統括ということで行ったものがあります。100名を超える市民の方々が、ご参加くださいました。

フォーラムでは、2つの基調講演と、それに続く3人の意見発表があり、続いてパネルディスカッションが行われました。



基調講演

基調講演では、私の「滋賀と守山の自然的・歴史的特徴」と川端弘氏（前守山市教育長）の「中山道守山宿の概説」がありました。

守山の活性化は、単なる科学的手法だけに頼るものではなく、その貴重な歴史・文化的遺産を生かしたものであるべきだ、というのが2つの講演の主張でした。

意見交換では、最初に濱崎一志氏（滋賀県立大学）が「守山宿の町家について」と題して中山道守山宿に残る町家の価値を建築学的立場から述べました。続いて山本正之氏が「守山の古民家に住む者・所有するものの立場」と題して文化財的民家に住む同氏の、自分の家に対する愛着と、それにもかかわらずその維持が大変に苦しいことを率直に訴えました。井上純作氏は「町家活用の事例から考える」として、他地域での町家活用の例を紹介しながら、生きた活

用のためには市民自体が息長く続けるソフト面の充実が求められるのだと述べました。一住民として自分が日ごろ感じている所を、これも率直に述べました。



意見発表・守山の建築資産として「町家」を捉えた発表

最後に、舟橋和夫氏（龍谷大学）をコーディネーターにして、中條忠文氏（守山学区長）、濱崎一志氏、石田みち代氏（ループプランニング代表取締役）、清原健氏（み

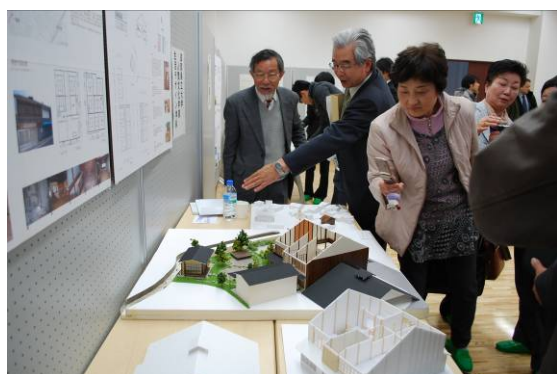
らいもりやま21代表取締役）、山倉雅雄氏（同、取締役）が意見を述べ、フロアからの意見に応じました。



パネルディスカッション

ブースでは滋賀県立大学、立命館大学、近畿大学の学生による、古民家活用模型や小学校建替え案などが展示されました。

これまで守山FSで行ってきた研究会は、今年度も継続し、多くの方々と守山独自の資産を利活用したまちの活性化を考えていきたいと思っています。皆様のご参加をお待ちしております。



学生の展示

朽木フィールドステーション

溪流発電装置の試験稼働 ―「水のエネルギー」を活かした生業づくりに向けて―

生存基盤科学研究ユニット研究員 増田 和也

朽木FSでは、『くらしの森』の再生を目標にしています。これは、山の恵みで暮らしを立てる生業基盤をつくっていくことです。私たちは、「火のエネルギー」と「水のエネルギー」に着目して、この目標に取り組んでいます。このうち「火のエネルギー」については、2月号でお伝えしましたように、滋賀県高島市今津町棕川地区でカヤ株移植によるカヤダイラの修復試験を始めています。もう一つの「水のエネルギー」では、奥山の溪流において水車を用いた水力発電システムを構築し、そこから取り出したエネルギーを山菜栽培や雪室などに活用できないかと構想しています(図1)。

＜くらしの森＞ 水のエネルギー・システム模式図

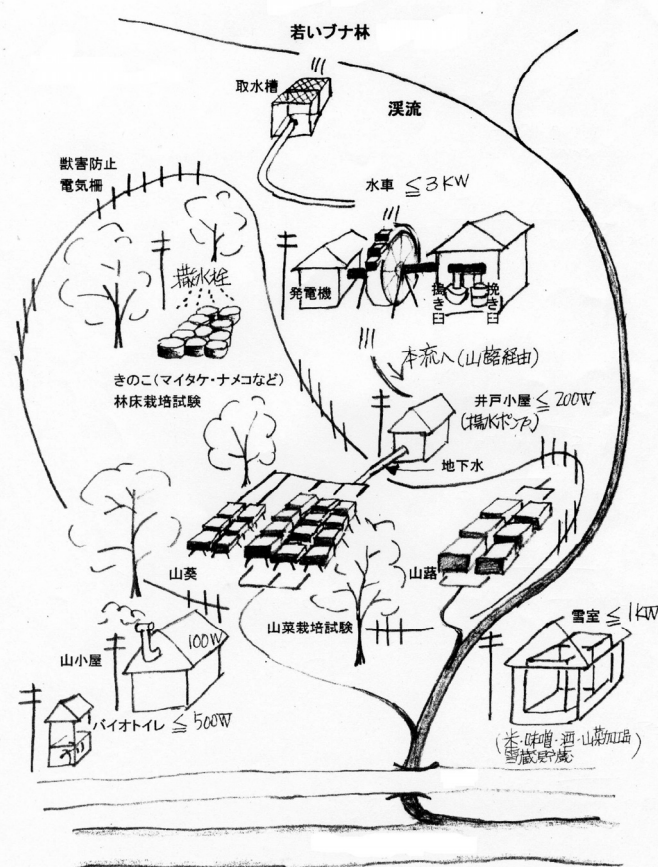


図1 水のエネルギーを活かした「くらしの森」再生の構想

渇水期など溪流の水量減少による発電量の低下に備えるために、計画では太陽光パネルも併設し、

水のエネルギーと太陽のエネルギーを合わせたハイブリッド式発電装置とします。水車という昔ながらの技術と最新の発電装置を組み合わせたという意味で、これはハイブリッド・テクノロジーともいえそうです。

山の恵みを活かす新しい技術の確立を目指して、これからも模索と実験を続けていきます。



でき上がった水車発電システム。まずは、ホースで水をかけて稼働実験。



制御盤。過度に電流が流れないように制御します。



蓄電池。発電した電流をストックします。

ハイブリッド式溪流発電装置を実際に稼働しながら、現段階での課題と今後の展望について検討する会を下記のとおり開催します。ぜひ、ご参加ください。

日時:平成 21 年 4 月 18 日午後 2 時から

会場:小森バイオ研究所(滋賀県大津市真野大野 1-6)

参加ご希望の方は朽木 FS 研究員の今北(090-8651-0739)までご連絡ください。詳細をお伝えします。

■第11回 定例研究会

1. 日時：平成21年4月24日（金）16:00-19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）

日本の農村、農業、漁業の存在をアジアに発信する意義 —3月5-7日のエクスカーションの報告— 東南アジア研究所 安藤和雄

「日本にも農村、農業や漁業があった。それを学べただけでも、大変意義深かった。ありがとう」と、Novaty Eny Dunga（以下、ノバティ）さんは、エリを見に行った船上で波しぶきをあびながら話してくれました。彼女は、インドネシアのハサヌディン大学で、農業・農村開発を専門として研究と教育に従事されており、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と東南アジア研究所が実施した若手研究者交流支援事業により、今回はじめて日本を訪れたのです。この交流支援事業と、生存基盤科学研究ユニットの萌芽研究、トヨタ財団のアジア隣人ネットワーク事業との合同で行われたエクスカーションには、彼女の他に、ミャンマー、ラオス、インドネシア、バングラデシュ、インド、カンボジアから総勢二十数名が参加し、3月5-7日の3日間、亀岡、守山のフィールドステーションが受け入れとなり、京滋の農村部を訪れました。参加者の中でも、ノバティさんは旧美山町北集落かやぶき屋根の里の民俗資料館や守山漁業協同組合の関係者の話に熱心に耳を傾け、質問をしていました。「日本は、工業の発達した国だと聞いていたので、都市や工業ばかりだろう、と想像していたのです」と、驚きの理由を説明してくれました。彼女は、日本では農村、農業、漁業がまとも存在していないと思っていたようです。

3月5日の午後に、NPOプロジェクト保津川と保津川遊船企業組合の協力を受け、亀岡フィールドステーションが企画した、保津川下りの歴史と木船や木船操作に関する現役船頭さんからの実演と熱のこもった説明からエクスカーションは始まりました。その日は、国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた美山町北集落の民宿に泊まりました。6日の午前には、雨で肌寒い朝でしたが、北集落の伝統農家屋群と、集落住民の保存会が運営するかやぶき農家に生活用具や農具を陳列した民俗資料館を見学し、いりり端での館長さんの説明に、参加者は聞き入っていました。午後は琵琶湖環境科学研究センターで講義を受け、琵琶湖博物館を見学しました。7日は、守山フィールドステーションの企画で、守山漁業協同組合の婦人会のみなさんによる琵琶湖の日本在来の淡水漁調理実演を午前に見学し、交流をかねた昼食会後、現役漁師の戸田直弘さんから琵琶湖の環境や外来魚問題の危機的状況に関する話を聞き、戸田さんと、同じく現役漁師である今江光夫さんの二隻の船に分乗し、強風のなか、琵琶湖の漁業の現場である小鮎のエリや、新旧の野洲川河口の見学にかけました。ノバティさんは、この時私と同じ船に

3. 発表者：井上純作（前守山市教育部長）

4. 発表内容：

「守山活性化フォーラムを終えて —住民がつくる守山—」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

乗り込みました。そして、「新しい考え方を学べたのはよかった」とエクスカーションの感想を締めくくってくれました。内心、私は大変嬉しかったのです。この一言を日本の農村部で農業や漁業、林業と向かいあって生きている人々にぜひとも届けたいのです。アジアの開発途上国といわれてきた国々では、現在でも、農村部での問題は、社会経済開発であると認識されていることが一般的です。しかし底流では、高等教育やインフラ整備などの充実により、皮肉なことに、日本が経験したように、農業、農村離れの現象がすすみつつあります。ノバティさんは、日本の工業化、都市化社会の中での農村、農業、漁業が抱えている問題が、単なる生産の問題としてではなく、暮らしと社会、文化の問題として、「在地の人々」に捉えられ、農村振興の基本にあることを実感できたのでしょうか。都市に追いつくことが農村開発ではなく、農村文化の良さ、重要性を「在地の人々」が自覚することこそが、現代の農村部が抱えている問題を自ら克服していく糸口となっています。このことを、美山町や亀岡市、守山市など現在の日本の農村、農業、漁業を支えている人々の実践は教えてくれています。日本の農村振興の現状を、世界に、特に、アジア諸国に発信していくことは、世界の農村に住む人々をかならず勇気づけるでしょう。地球の生存基盤を考えることは、文化の問題でもあるということ、私たちは発信していきたいのです。

3日間のエクスカーションに参加したバングラデシュの村のNGOの3名、ラオス国立大学農学部の教員3名、ミャンマーのサイクロン被災村復興ボランティアの1名は、2月27日から3月12日の期間に、亀岡市文化資料館と美山町知井振興会における研修と交流プログラムに参加する機会を得ました。エクスカーションをはじめ、これら全てのプログラムを実施するにあたり、関係者の皆さんには大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。特に、3月7日の朝は、悪天候で他の船は出港を見合わせたにもかかわらず、戸田さん、今江さんに漁にでいていただきました。琵琶湖在来魚をエクスカーション参加者に味わってもらいたいというお二人と、守山漁業協同組合のご協力とまごころに感謝致します。皆さんのご協力のおかげでプログラムを無事終了でき、日本での思い出を招聘者の皆さんに自国に持ちかえっていただくことができました。ありがとうございました。

ニューズレター編集室からのお知らせ

今月号より、タイトルヘッドをリニューアルいたしました。「ざいちのち」には、まちやむら、そこに暮らす人びと（=ざいち）の、知恵や生きる力（=ち）に学び、実践することの意が込められています。また、背景の写真では、季節に応じたフィールドステーション周辺の風景を紹介していきたいと思っています。今後とも、実践型地域研究ニューズレター「ざいちのち」をよろしくお願いいたします。